

アカアマダイ栽培基礎調査

内田 浩

1. 研究目的

中間育成を通して、適切なアカアマダイ育成方法を見出す。また、現状の漁業実態および資源状態を把握する。

2. 研究方法

(1) 中間育成試験

水産総合研究センター宮津栽培漁業センターで種苗生産されたアカアマダイ稚魚（全長 50 mm）約 1 万尾を平成 16 年 1 月に鹿島浅海分場に搬入して、中間育成を実施した。

(2) 漁業基礎資料の収集

平田市漁協の佐香支所において市場調査を実施し銘柄別の体長組成を把握するとともに生物調査から銘柄別の平均体重等を把握する。また、小伊津漁港においては出漁日別、船別、銘柄別漁獲量の資料を過去に遡って整理した。

3. 研究結果

(1) 中間育成試験（平成 16 年 4 月以降の結果）

飼育密度を対象にした試験では、3.3 トン水槽（水量 2.5 トン）を用いて、収容尾数を 2,000 尾及び 3,000 尾とした。成長については、飼育密度による差は見られなく、5 月末の時点で平均全長は 2,000 尾区で 96.2 mm、3,000 尾区で 92.8 mmであった。生残率は、水温が低い時期には安定しており、4 月末の生残率は 90 %以上であった。しかし、水温の上昇に伴って、生残率は徐々に低下した。また、全長が 70 mm程度に成長すると、非常に敏感になり、刺激を与えると水槽壁に激突する個体もあった。さらに他の魚を攻撃する個体もあり、そのために眼球の突出や鱗が剥けている個体が増加した。

水温上昇に伴う生残率の低下を防止するための低密度飼育試験（500 尾、1,000 尾、1,500 尾搬入）を 6 月に同様な水槽規模で実施した。しかし、生残率は水温（20 ～ 24 ℃）の上昇に伴って斃死尾数が増加した。生残率の減少傾向は、各水槽とも類似しており、飼育尾数を減らしても生残率低下を防止することはできないため、飼育密度より水温の影響のほうが大きいと考えられた。

餌料の簡素化の試験では、これまでの配合飼料と冷凍アミの併用と配合飼料のみの試験区を設定した。また、加温区（17 ℃）も設けて、加温による成長差も比較した。水槽は 1.4 トン（水量 1 トン）である。成長は、やはり加温区が早く、4 月中旬で 10 cmを越えた。餌料の差による成長差は、ほとんど見られなかった。また、生残率は、95 ～ 98 %と各水槽とも非常に高く、斃死魚はほとんど見られなかった。したがって、配合飼料のみでの中間育成も可能であり、成長促進のためには加温が必要と判断された。

(2) 生物測定結果

佐香支所におけるアカアマダイの銘柄は、3S、2S、S、M、L 及び LL の 6 段階あり、各銘柄とも魚重量 3 kg であった。年間を通じて各銘柄の全長は、殆ど変化は見られず、各銘柄の平均全長は、3S : 241 mm、2S : 278 mm、S : 306 mm、M : 338 mm、L : 392 mm、LL : 452 mmであった。

4. 研究成果

平成 17 年 3 月に山口市で開催された平成 16 年度アカアマダイ栽培漁業検討会において、中間育成結果について報告した。